氏名（ふりがな）：井上　輝子（いのうえ　てるこ）
現在の肩書：和光大学名誉教授・山川菊栄記念会代表
プロフィール：1942 年生まれ。1970 年代初頭のウーマンリブ運動に参加する中で女性学と出会い、和光大学で女性学講座を担当しつつ、社会教育や、川崎市等の自治体女性行政にかかわってきた。1973 年～2012 年３月和光大学教員。1983 年から山川菊栄賞選考委員。2007 年から山川菊栄記念会代表。主要著作は「新・女性学への招待」（2011）「女性学事典」（共編 2002）

１．かながわ女性センターについて一番印象に残っていること

1988 年 11 月に開設された「山川菊栄文庫」を中心に、かながわ女性センターでは、山川菊栄関連の行事を多彩に展開してきた。山川菊栄記念会も、時に応じて協力させていただいてきた。

私が特に印象に残っているのは、山川菊栄生誕 120 年・没後 30 年に当たる 2010 年に、実施した記念事業だ。従来から周年記念事業で行ってきた連続学習会やシンポジウム、記念冊子の発行に加えて、この年、私たちは、山川を知らない若い世代にもアピールしようと、ビジュアル性を重視、展示パネルと映画を制作した。

展示パネルは、だいぶ前に、女性センターですでに数枚作成・保管されていたが、かなり古くなっていたため、記念会であらためて、「山川菊栄の生涯と思想」と題して、全９枚のパネルを制作した。「生い立ちと思想形成」「母性保護論争から『婦人部』論争まで」「戦時下の山川菊栄」「労働省婦人少年局長として活躍」「労働省婦人少年局の仕事」「山川菊栄と海外」「『婦人のこえ』と婦人問題懇話会」に、記念会からのご挨拶を加えた９枚である。

かながわ女性センターでは、この年のセンター祭りを初め、その後も毎年、図書室を中心に、他の山川菊栄の遺品と合わせて、このパネルを展示してくださっている。

記念会では、山上千恵子監督に依頼して、ドキュメンタリー映画「山川菊栄の思想と活動－姉妹よ、まずかく疑うことを習え」を制作した。映画は、山川菊栄の誕生から大正期以来の社会主義婦人論の論客としての活動を経て、戦後労働省初代婦人少年局長としての活躍と、その後の研究・執筆活動などを辿った作品だが、単に写真や著作を紹介するだけでなく、直接山川に接した 23 人のナマの声をふんだんに収録しているほか、かながわ女性センターの映像も含まれている。そのせいか大変好評で、記念会が把握しているだけでも、全国各地ですでに 80 回を超える上映会を開催している。

かながわ女性センターで開催された 2011 年 12 月４日の上映会は、格別印象深いものがあった。その日は快晴で、江の島の橋の上から、くっきりと見えた富士山の姿がまだ目に焼き付いている。さすが山川菊栄の地元だけあって、多くの方々が集まって下さった。

駒形館長のご挨拶と映画鑑賞の後、山上監督、プロデューサー兼カメラ担当の山上博己さんと井上のトークセッションをしたが、会場からの発言も活発で、とても盛り上がったことを記憶している。

山川菊栄とかながわ女性センターとは、切っても切れない関係にあることを、つくづく感じた次第である。

２．女性センター32 年の功績と課題

かながわ女性センターは、神奈川県立婦人総合センターとして、1982 年にオープンした。すでに東京都が日比谷図書館内に婦人情報センターを開設していたが、情報収集・発信に加えて、学習、調査研究、相談事業などを含む女性のための総合センターとしては、全国初の試みであった。その後、多くの自治体が女性センターを創設するにあたって、このセンターを見学し、参考にした例も多いと聞く。

宿泊施設があることも、大きな魅力であった。私は 1980 年代に女性雑誌研究会を立ち上げ、日本・メキシコ・アメリカ３国の女性雑誌の比較研究を実施したが、泊りがけで会議や研究交流ができる、このセンターをよく利

用させていただいた。大学のゼミ合宿の場としても、使わせていただいた。ＦＣＴ（市民のメディア・フォーラム）のメディア・リテラシー研修会も毎年ここで開かれたし、全国女性史交流会もここを会場にしたことがあったと記憶する。朝から晩まで会議漬け、研究漬けでは疲れるが、昼食時や休憩時間に、センターの外に出て、海岸を散策したり、時には弁天堂にまで足を伸ばす楽しみもある立地条件も幸いしたのではないだろうか。

センター主催の調査・研究活動も盛んで、セクシュアル・ハラスメント調査やメディア・リテラシー関連の冊子など、成果物も多い。学習活動についても、私は何回かリーダー研修の講師として関わったが、受講者の方々の前向きな姿勢と理解力の高さに、しばしば感動したものだ。

さらに、このセンターの、他都市のセンターが持たない独自の財産として、図書館が収集した女性史関係の資料の豊富さは特筆に値する。1979 年に発足した「婦人関係等資料収集委員会」（名誉会長・山川菊栄、会長・谷野せつ、副会長・大羽綾子ら）の提言を受けて収集した、労働省婦人少年局や国労婦人部資料を含む多数の貴重な資料が、図書館の基礎をなしている。さらに山川菊栄の没後、ご遺族から、菊栄旧蔵の和書・洋書・リーフレット類などが寄贈され、1988 年に先述の「山川菊栄文庫」が開設。2006 年３月時点での資料目録には、和書 3069 点、洋書 789 点が掲載されている。さらに、2014 年に、追加資料を整理・寄贈。

山川菊栄とその時代を研究するものにとって、この文庫は、欠かせない宝庫となっている。そのため、海外からの研究者も含め、訪ねる人が多い。

３．新たなセンター又は女性行政への要望･提言

女性センターは、各自治体の男女平等政策の推進拠点として大きな役割が期待されてきたし、男女平等社会が実現したとは言い難い現状において、なおセンターの果たすべき役割は大きいと思われる。とりわけ、婦人総合センターとして出発したかながわ女性センターには、男女平等実現に向けた総合的な機能が期待される。

しかし、先ごろ発表された新男女共同参画センター〈仮称〉案では、宿泊施設以外にも生涯学習施設を廃止し、図書は県立図書館に移管するなど、総合センターとしての大幅な縮小が計画されている。県の財政難の故とはいえ、とても残念と言わざるをえない。

すでに県会等で決定されている以上、縮小移転の計画を抜本的に変更することは難しいと思われるが、私はせめて、次の２点を要望したい。

１つは、かながわ女性センターの誇りともいうべき膨大な蔵書を基にした、女性資料館〈仮称〉の新設である。

平成 27 年４月に横浜市西区紅葉ヶ丘の県立図書館に、女性センター所蔵資料〈約 10 万冊〉の大半（県立図書館との重複分のみ除籍）を移管する計画と聞くが、他の分野の図書類の中に、女性史・ジェンダー問題関連の資料が紛れてしまっては、利用者にとっては、使いづらいものになってしまう恐れがある。また、単なる保管ではなく、専門の司書による資料の整理・管理および利用者が閲覧しやすい条件づくりが欠かせない。そのためには、独立した女性資料館の建設が急務である。もし実現すれば、全国初の自治体による女性資料館として、新たな資料が寄せられる可能性もある。そして、国内外の研究者をはじめ、女性ないしジェンダーに関心を持つ多くの人々が、活用できる有益な機関となるに違いない。

もう１つの要望は、藤沢市に移転予定の新しいセンターが、横浜市に移転ないし新設する県立図書館ないし女性資料館と、密接に連携し、センターの調査研究、情報発信等に、大いに活用してほしいことである。場所は離れていても、センターの総合性をできる限り追求してほしいものである。

氏名（ふりがな）：江刺　昭子（えさし　あきこ）

現在の肩書：女性史研究者

プロフィール：1942 年、岡山県生まれ。早稲田大学教育学部卒業。女性誌の『ミセス』編集者を経て、ノンフィクションライター。女性史研究者としては、主に、県内外の地域女性史編纂を指導する。著書は、『草饐―評伝大田洋子』、『覚めよ女たち―赤瀾会の人びと』、『樺美智子―聖少女伝説』など。

１．かながわ女性センターについて一番印象に残っていること

わたしが今も地域女性史研究を仕事の中心に据えているのは、かながわ女性センターの女性史編纂にかかわったのがきっかけである。

それまではノンフィクションと中央の女性史の執筆に専念していたが、1984 年から本格化した神奈川県の女性史編纂事業に専門委員として招かれ、初めて地域女性史に目を向け、その面白さと必要性に目を啓かれた。

初代館長金森トシエさんの発案で、行政（女性センター）と専門家と住民の三者が協同して県の女性史を編纂した。一般の自治体史のように専門家のみで編纂するのではなく、公募による県民女性が聞き書きや資料収集を行う。初めての試みで、紆余曲折はあったものの話しあいを重ね、87 年に『夜明けの航跡―かながわ近代の女たち』、92 年に『共生への航路―かながわの女たち'45～'90』を出版。生活者である住民の視点が生かされたユニークな女性史で、以後、神奈川方式として全国の女性史編纂のモデルになった。

県内ではその後、行政主導と自主グループの違いはあるが、川崎、横須賀、厚木、鎌倉、小田原で、住民参加の女性史が完成したのは、県の動きに倣ったからである。

地域に関心が向いたわたしは、女性史編纂の折のワーキンググループ有志に声をかけ、88 年に県の女性史研究を目的に自主グループ“史の会”を立ち上げた。女性センターを拠点にした研究成果は、論文集『史の会研究誌』４冊と、県にゆかりの女性 243 人のミニ評伝『時代を拓いた女たち』Ⅰ、Ⅱ集に結実。さらにセンターとの共催でたびたびシンポジウムや懇親会を開催して、地域女性史の普及をはかるとともに県内の女性史グループのネットワーク作りに努めた。

98 年には実行委員会方式で「第７回全国女性史研究交流のつどい　in　かながわ」を２日間にわたり女性センターで開催。全国から延べ 1200 人の参加者を得て盛会だったのは、センターの全面的なご協力があったからで、実行委員会事務局長として忘れがたい。

30 年余、社会教育の集団学習に指導者としてかかわりながら、わたし自身が学習者から多くを教えられ、双方向の学びの場となったことに感謝したい。

２．女性センター32 年の功績と課題

県レベルで他県に先駆けたかながわ女性センターの功績は、挙げればきりがないが、出発にあたり、生活科学部、婦人労働部、福祉部、生涯学習部、企画調整部の５部門をセンターに集めて、女性問題を総合的、かつ有機的に連携しながら解決すべく取り組んだのは、先見性があった。

そうして多様な視点で女性問題を明確にして方針を定め、講座や研修プログラムが組まれた。多彩なテーマ、第一線の講師らから問題意識を呼び醒まされ、実践の場へと一歩を踏みだしていった人は数しれない。意識の変化は数字では測れないが、かながわ女性センターが「女の時代」と言われた 80 年代、90 年代を先導したのはまちがいない。一例だが、現在、映画界で多くの女性監督が活躍しているのを見るにつけ、江の島映画祭で、集中的に女性映画監督の作品をとりあげたのがその下地を作ったのだと思う。

講座やイベントを通じて多くのグループが生まれ、広いスペースがいつも人で賑わい、女性たちの出会いの場になった。あそこに行けば、誰かに会える。昨日までは知らなかった人と今日は話しこんでいる。センターはそういう空間だった。

付属図書館の存在の大きさも挙げておきた

い。79 年にはすでに女性問題専門図書館をめざして婦人関係等資料収集委員会が発足。全国から戦前、戦後の女性および女性労働関係の資料や単行本、官庁調査報告書の寄贈を受けている。山川菊栄文庫、労働省婦人少年局と国鉄労働組合婦人部の資料など、ここだけが所蔵する第一次資料が多い。『婦人労働と資料』に資料目録と解説が掲載されており、これも貴重な記録である。

女性史関連の図書・資料が充実しているのも特徴。古書や女性運動のビラ、女性誌の復刻版など、手に入りにくい資料が揃い、蔵書数は一時、11 万点を超えた。女性問題に特化した、和書だけでいえば日本一である。学習グループの成果は、この豊富な資料に負うところが大きい。大学や研究機関に属していない民間の成人女性の学習・研究活動にとって、女性センターの図書は命綱だった。

3. 新たなセンター又は女性行政への要望・提言

32 年前に比べると、女性問題の多くは解決に向けて一定の進展をみた。その中で最も遅れているのは労働問題だろう。その場合、働き手が減少するから女子の労働力が必要だというご都合主義、あるいは国の景気の動向に左右され、安い労働力として扱われるのでは、根本的な解決にほど遠い。働くのは当たり前という覚悟、自立した人間として一生を送れるような働き方を若い人たちに示してほしい。就職応援、キャリアアップや起業の手助けはもちろん必要だが、その前に、中高校生など、社会に出る前の女性たちが正しい職業観を身につける機会を設けてもらいたい。出張講座が有効だ。

高齢社会である。女性の場合、子育て期とその後の人生の割合が半々に近いくらい寿命が伸びている。職業を持っていても、定年後 20 年以上の「その後」がある。この長い時間をどう生きるのか。世界にも日本にも前例がないだけに、とまどいながらその日暮らしをしているシニアが多く見受けられる。創造性を生かしながら自分で自分の道を切り開いて生きていくにはどうしたらいいか。考えるヒントや方向性を示すのも女性センターの役割ではないだろうか。実情に応じたシニア塾が望まれる。

男女共同参画社会を展望するとき、男性の意識の遅れが目立つ。料理教室だけでなく、男性が生活者として自立できるような方策が求められている。定年後、ボランティア活動をしたいが、どこに行って何をすればいいのか、入口が見つからない人も多いと聞く。生活者としての男性問題に限って、講座やセミナーの機会を増やすべきだろう。そのためには、男性も気軽に訪れることができるような雰囲気作りも必要になってくる。

ストーカーやＤＶ被害は増加傾向にあり、相談業務への期待は、今後、より大きくなるのではないだろうか。20 年以上前になるが、わたしは５年にわたりストーカー被害を受けた。その際、相談したり、事情を聴かれたりする警察や検察の担当者は全て男性で、性的被害が迫っている恐怖と緊張の日々が理解されず苦しんだ。

被害者に落ち度があるような見方は今も世間に根強くあり、誰にも相談できずに怯えて暮らす潜在的被害者は多いとみられる。夜間にも開設するなど、被害者が気軽に相談に行けるような場が必要だし、医療機関と連携したケアも課題だ。被害と加害は切りはなせないから、加害者のほうの立ち直りにも併せて取り組めないものだろうか。

女性センターの移転にあたり、図書館は横浜市内の県立図書館に移管される。移転先では女性問題図書として別扱いされると聞いている。つまり、ほぼ現状の図書館が場所だけ移動すると理解している。ここしか持っていないものはもとより、図書および資料を廃棄処分しないでほしい。一度廃棄したものは、二度と元に戻らない。雑書に見えても、女性問題図書として１カ所にまとまっていることに意味がある。

図書館の価値は、利用者数、貸出冊数だけではかれない。歴史的価値のある資料を保存するのも図書館の役割である。女性問題に特化したこの図書館を神奈川県の宝として、より専門性の高い図書館に発展させてほしい。

また、以前から要望してきたが、県内の女性の歩みを伝える資・史料を保存するアーカイブス機能の新設もお願いしたい。県内のグループが女性史を編纂するために収集した資料は、現在、グループや個人が所蔵しているが、放っておけば遠からず散逸する運命にある。後学の人たちのために、１カ所に保存、公開する手だてを検討していただきたい。

氏名（ふりがな）：江原　由美子（えはら　ゆみこ）
現在の肩書：首都大学東京理事・副学長　一般社団法人神奈川人権センター理事長
プロフィール：1975 年東京大学文学部卒業、1979 年同大学院社会学研究科博士課程中退、博士（社会学）。お茶の水女子大学助教授などを経て、2005 年東京都立大学人文学部教授、2009 年より現職。主な著書、『ジェンダーと社会理論』（2006）、『ジェンダー秩序』（勁草書房、2001）など。

１．かながわ女性センターについて一番印象に残っていること

最初のかながわ女性センターでのお仕事は、金森トシエ館長の時だと思います。金森先生と歓談した時、金森先生の強い情熱を感じました。その記憶は、今でも鮮明です。

また私は藤沢市にある県立高校出身ですので、片瀬海岸や江の島に、愛着があります。その意味で、かながわ女性センターの印象は、何と言っても、海！です。センターに行くまでの橋から見た青い海、強い風、富士山、時には吹き付ける風雨。久しぶりに見る江の島の景色は、見慣れているとはいえとても美しく、心が癒される思いでした。宿泊施設は低料金でしたので、大学や大学院のゼミの合宿に、良く使わせてもらいました。交通費も手ごろで、その割にふだんの環境を離れて「リゾート気分」に浸れるのが、何よりも大きなメリットでした。早朝の防波堤等の散歩や、江の島探索等、思い出は数限りなくあります。センターの職員の方に教えていただいて、近隣の磯料理の店で皆でおいしい夕食をいただいたことも、帰り路にセンターの近くや駅の近くで食事したことも、良い思い出です。

２．女性センター32 年の功績と課題

かながわ女性センターの功績は、何と言っても、その先進性にあると思います。都道府県レベルで全国初の女性センターとして、1982 年に設置された当初は、全国から視察が相次いだと聞いています。現在でも「女性センターって何をするところなの」と聞かれることがあるのですから、当時は本当に手探りだったと思いますが、実際に設置されると、地域の女性たちの活動拠点として、あるいは研究相談事業の拠点施設として、本当に有効に機能しました。だからこそ、今日では、女性センター設置の意義が広く認識され、女性センターを持たない自治体の方が珍しいくらいに全国に広がっています。全国に普及した施設の最初のコンセプトを提供したかながわ女性センターの功績は、本当に大きいと思います。

３．新たなセンター又は女性行政への要望・提言

新しいセンターは、藤沢駅からも近く、利用者の利便性が増すと思います。特に、就業している女性の利用を促すためには、利便性はもっとも重要な要素だと思います。かながわ女性センターが設置された 1980 年代とは、社会のあり方が大きく変化し、若年女性の就業環境も悪化しています。そうした若年女性たちにも役に立つ女性センター、利用される女性センターになってほしいと思います。これまでのセンターは、景観的には本当に素晴らしい立地だったので、それが失われるのは残念ですが、新しい女性センターへの移転が、女性センターの機能強化につながることを期待します。

氏名（ふりがな）：奥山　明良（おくやま　あきら）

現在の肩書：成城大学法学部教授

プロフィール：1948 年兵庫県生まれ。東京大学大学院法学政治学研究科民刑事法専門課程博士課程単位修得退学。成城大学教授、専門は労働法。厚生労働省労働政策審議会雇用均等分科会公益委員、内閣府男女共同参画会議・女性に対する暴力に関する専門調査会専門委員などを歴任。著書に「基礎コース・労働」新世社、「職場のセクシュアル・ハラスメント」有斐閣など多数。

１．かながわ女性センターについて一番印象に残っていること

一番の印象は、かながわ海外女性事情調査団の一員として、アメリカ合衆国とカナダを対象に働く女性の仕事と生活の両立状況をはじめ、女性政策、民間の女性組織の運営・活動状況等を探るべく行った調査である。学識・県民代表・行政からなる６人のメンバーが、1991 年 10 月初旬から約２週間、全部で 30 以上の連邦政府機関、民間の組織やグループ等を訪問し、インタヴューを通じて調査を行った。

その成果は「Work & Family～かながわ海外女性事情調査報告書～」に結実している。当時の神奈川県、又かながわ女性センターの財政事情もさることながら、当時、同センター運営の重責を担われていた金森トシエ氏や星野昌子氏等関係当事者のご尽力がなければとうていかなわなかった事業であったろう。

２．女性センター32 年の功績と課題

今日では、女性を対象とした各種施策の策定をはじめ、その地位の向上や活躍の推進等を主要目的に活動する各種の行政機関や民間の組織・グループなどは当たり前の存在であるが、かながわ女性センターは、こうした時代の変遷にあって、全国に先駆けて設置されたところに、なによりその意義を認めることができ、爾来、女性問題が多面的な広がりを見せる中で、問題解決に向けての施策や実践などの方向づけを、県下のみならず社会全体に発信し、後発の同種機関や組織にとって、トップランナーとしての先導的役割を果たしてきた功績は大きい。

他面、いささか無い物ねだりの感はあるが、これまでの活動は、国等から提示された施策や課題への後追い的な対応など、既に顕在化している女性問題への対症療法的な対応にとどまりがちなところが見られなくもなかったが、今後は、企業その他社会を取り巻く状況変化の中で新たな女性問題の発生を予見し、これを県民その他社会へ情報発信し、その防止や問題解決のための施策等を提言するといった予防療法的な対応を可能にすることが課題でもあると思う。

３．新たなセンター又は女性行政への要望・提言

新たな女性センターの機能については、調査研究のほか、人材育成、相談、情報発信・意識啓発が強調されているが、必ずしもこの４事業を同じ比重で実施する必要はないように思う。

例えば、調査研究等は国レベルの機関にその多くを任せ、他の三つ、特に人材育成（地域での女性問題の情報発信や実践活動を担うリーダーの育成）等に比重を置いた事業展開も必要かと思う。そのためには、全国の自治体や各地の民間組織・グループと連携して相互間で人材交流を積極的に行うことが考えられてよい。